

附① 宮古島における貝斧の分布

安里嗣淳

宮古島には長間底遺跡における発見より以前に、すでにいくつかの遺跡で貝斧が発見されている。ただこれまでは陶磁器を伴う集落遺跡や洞穴などからの発見であり、明確に先史時代遺跡に伴うものとしては確認されていなかったのである。したがって、これまでは貝斧の伴出がどのような意味をもつのか、その位置づけができなかったのである。もっとも、陶磁器と共伴する貝斧の位置づけについてはひきつづき重要な課題のひとつとして残されている。以下、これまでの発見例を紹介する。

宮古島における貝斧は長間底遺跡を除いて6遺跡8個が知られている。いずれもシャコガイ製である。

1. カアラ洞穴発見の貝斧

下地馨氏蔵。城辺町砂川のカアラ貝塚の発見。

イ、A シャコガイの左殻を利用したもので、「ちょうつがい部利用型」である。

刃部のみを研磨し、刃縁は側面観が中心軸をとる。前面・背面・外縁側面はほとんど自然面を残し、殻内側面と基端は打剥調整されている。

ロ、B シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。ちょうつがい部が小さいためか、幅は殻内側を大きくとりこんでいる。加工は殻内側面と基端に打剥が施され、刃部のみ研磨されている。背面・前面・外表側面は自然面を残す。

2. 成川井洞穴発見の貝斧

C 下地和宏氏の発見、平良市教育委員会蔵。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部を研磨してある。胴部まで滑らかになっているが、この部分は研磨ではなく、長期の手なれによるもののようである。加工は他に殻内側面、基端への打剥がある。この打剥の境もゆるやかになっている。

3. 保良元島発見の貝斧

D 下地馨氏蔵。陶磁器や宮古土器を主体に出土する集落跡から発見されたものである。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部のみを研磨し、殻内側面、基端に打剥を施す。

4. 宮国元島発見の貝斧

E 前ヌヤー北側石室内採集。沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの右殻、ちょうつがい部を利用したものである。刃部および前面の稜が研磨されている。殻内側面と基端は打剥によって調整されている。

F 発掘区7地区チー50Ⅲ層の出土。沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの右殻、ち

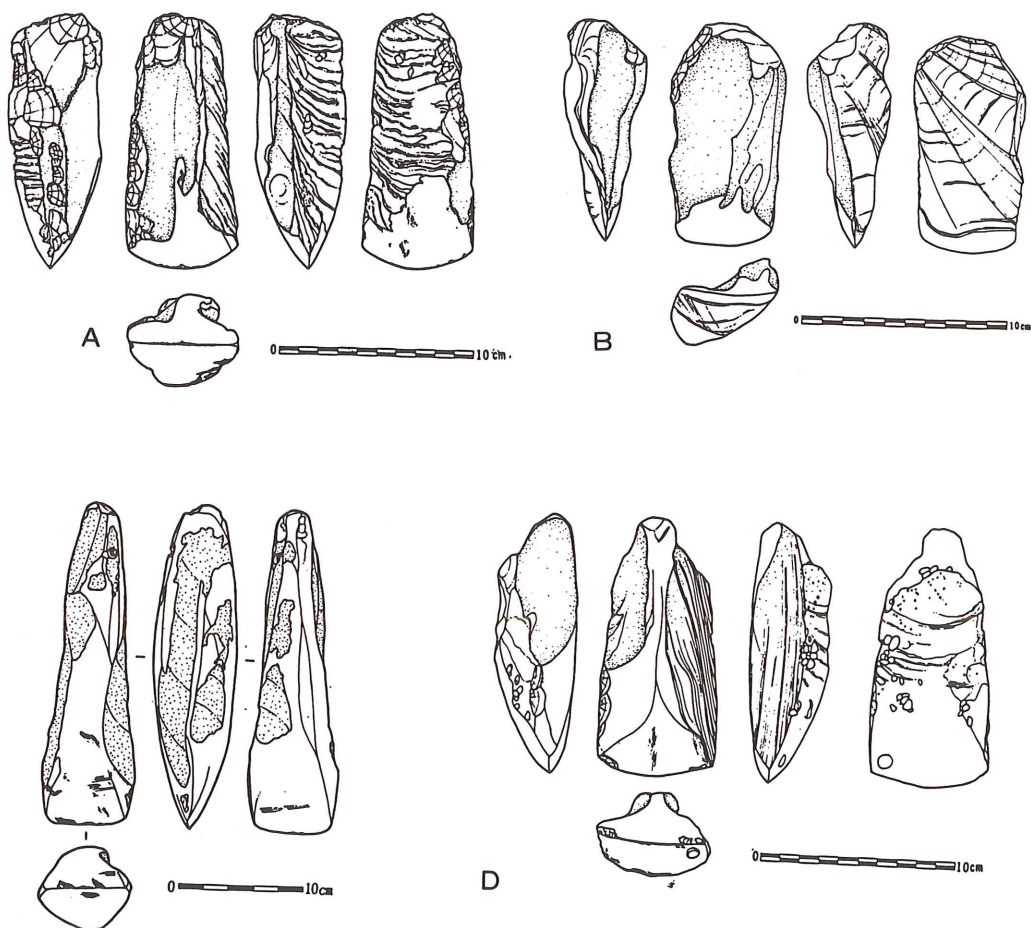
ようつがい部を利用したものである。刃部を研磨し、殻内側面と基端を打剥調整している。刃縁の磨耗が著しい。

5. 石原城遺跡^{いさらぼり}発見の貝斧

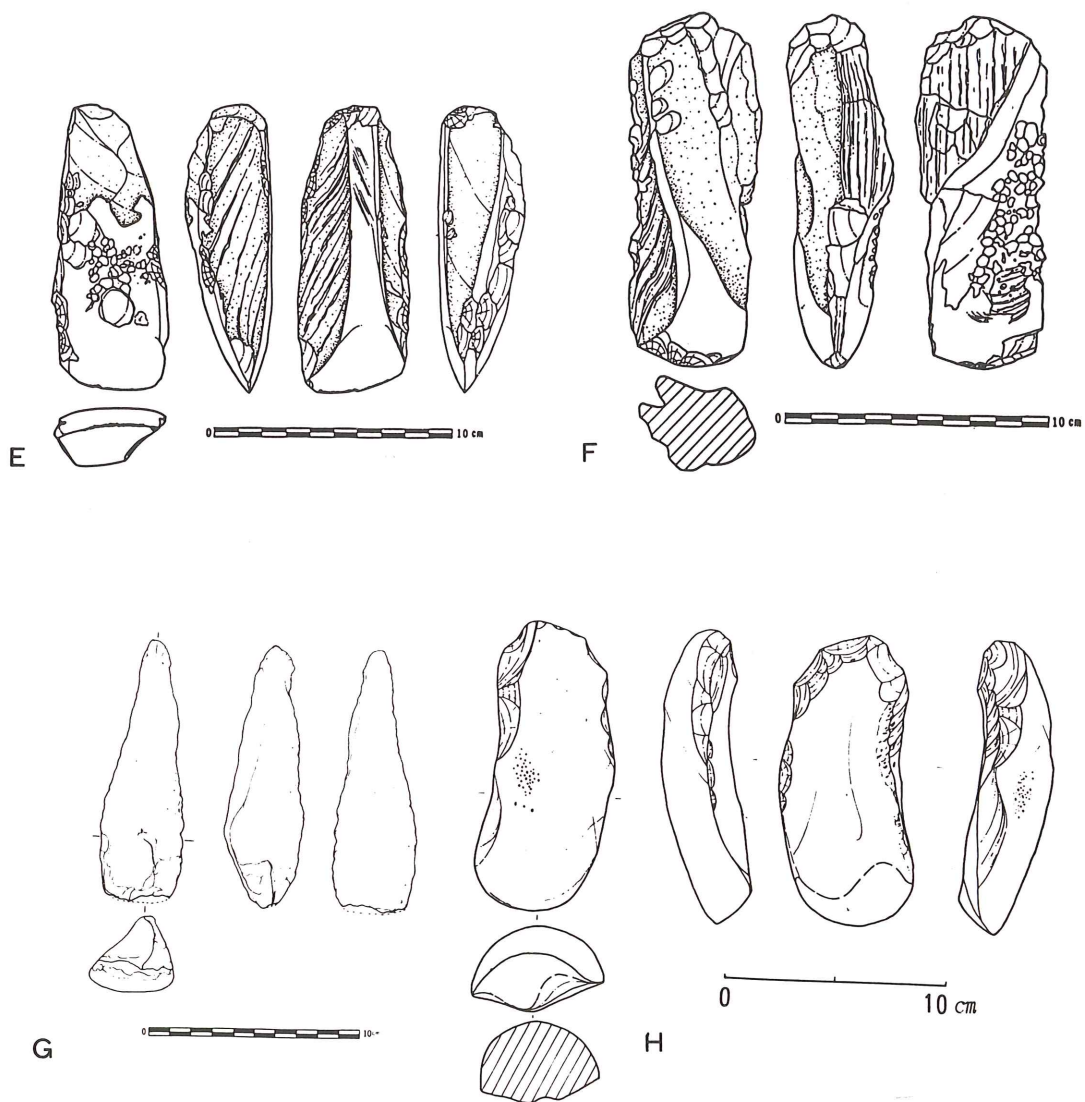
G 沖縄県教育庁文化課蔵。シャコガイの左殻、ちょうつがい部を利用したものである。未製品というべきもので、研磨面は見当たらない。打剥によって斧の形に仕上げてあるが、刃部の砥ぎ出しがまだ行われていない。

6. 平瀬尾神崎発見の貝斧

H 平良市文化財保護審議会の発見、平良市教育委員会蔵。シャコガイの右殻左側（後背側）を利用。かなり磨耗している。片面からのみ刃部研磨を施し、片刃状に仕上げてある。



A・B …カアラ貝塚 C…成川井遺跡 D…保良元島遺跡



E・F…宮国元島遺跡 G…石原城遺跡 H…平瀬尾神崎遺跡